



今之為
音印
事

丸
目
一
流
之
法

乃
神
之
法
也

亦
現
流
也

月二日

海力

地

書

鹿児島市史

III

監
修

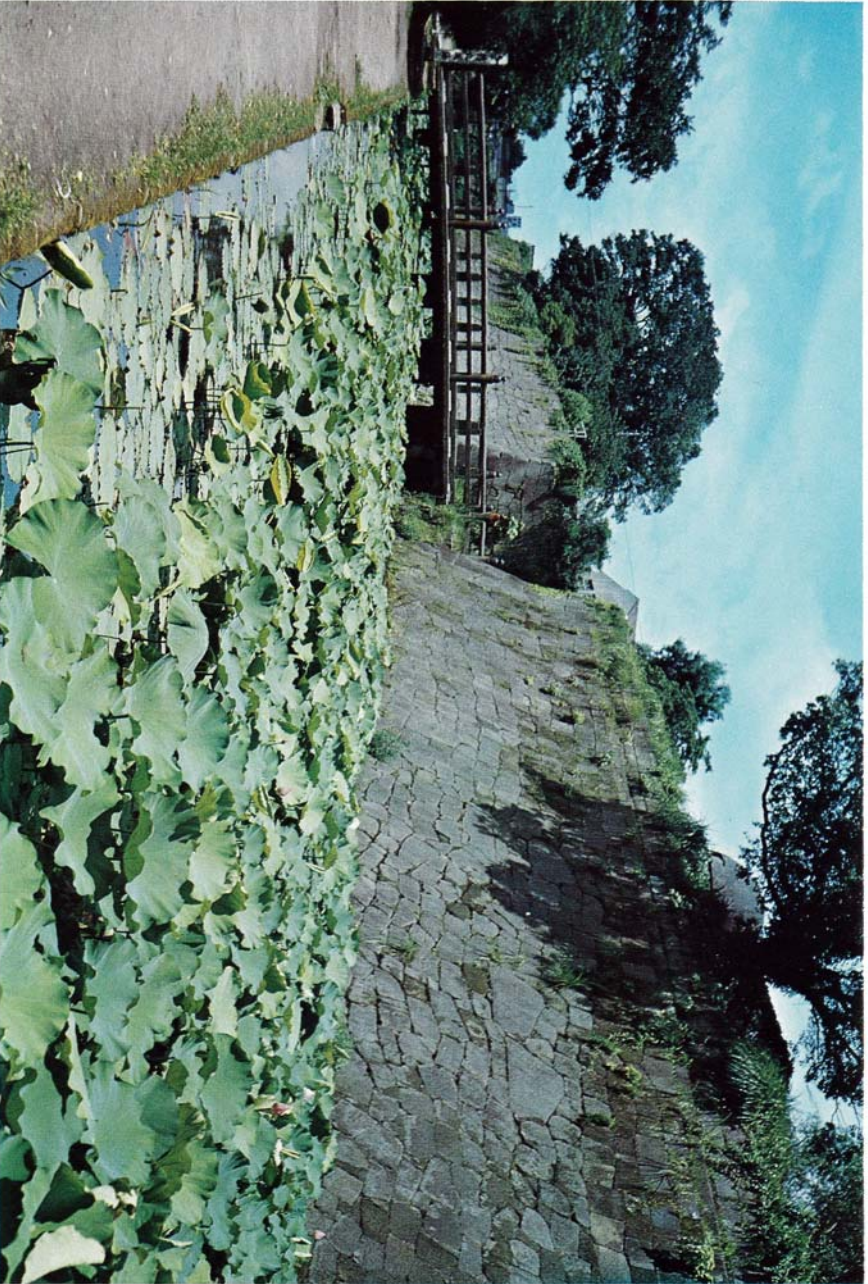
元鹿兒島市長
郷土史家

勝
目
清

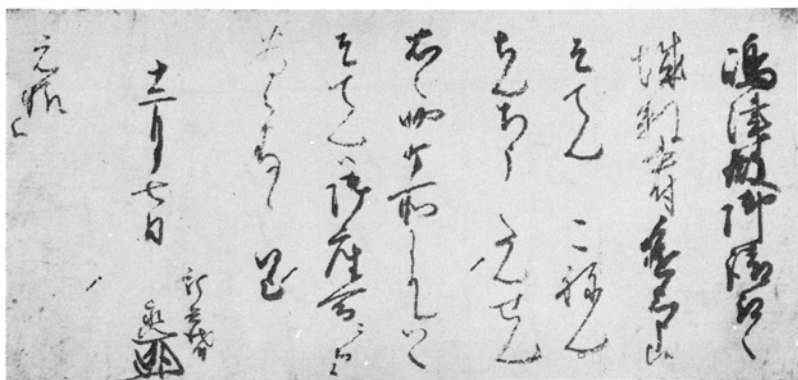
鹿兒島大学
名誉教授
鹿兒島女子
短期大学教
授

北
川
鉄
三

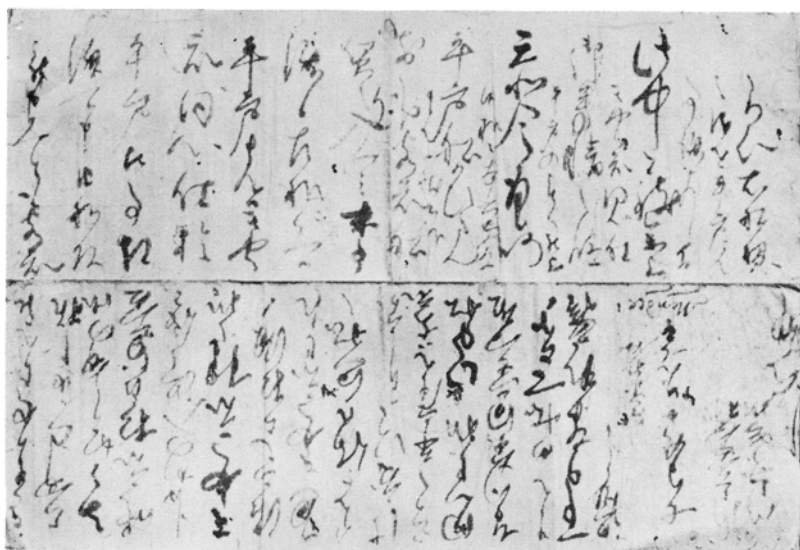
題
字
鹿兒島市長
末
吉
利
雄



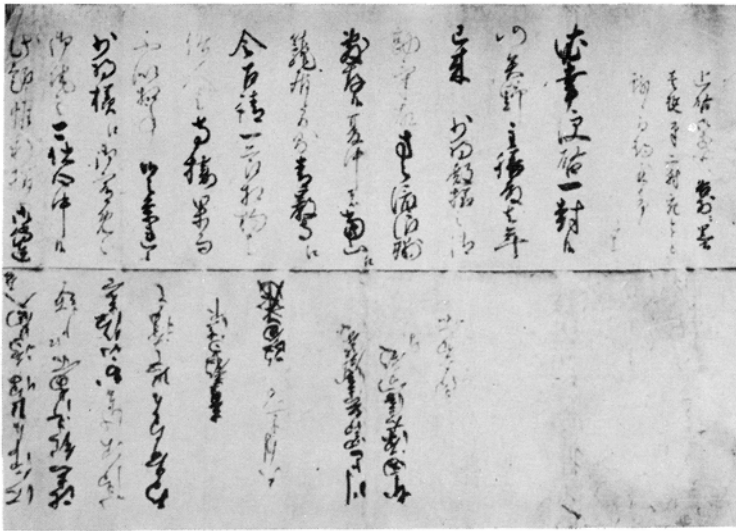
鶴丸城跡（城山町）



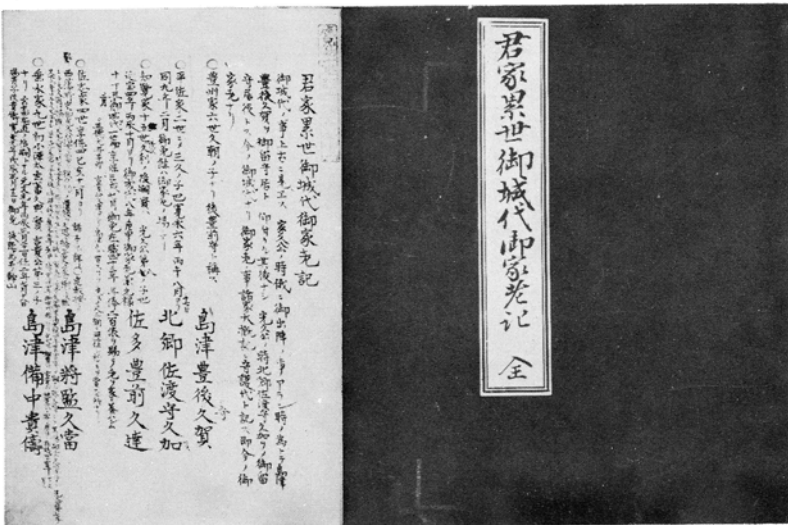
加世田家文書 4号(722頁)



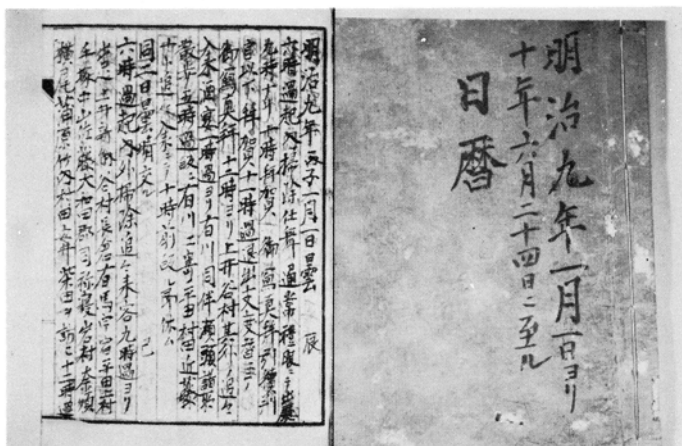
川上家文書 9号(725頁)



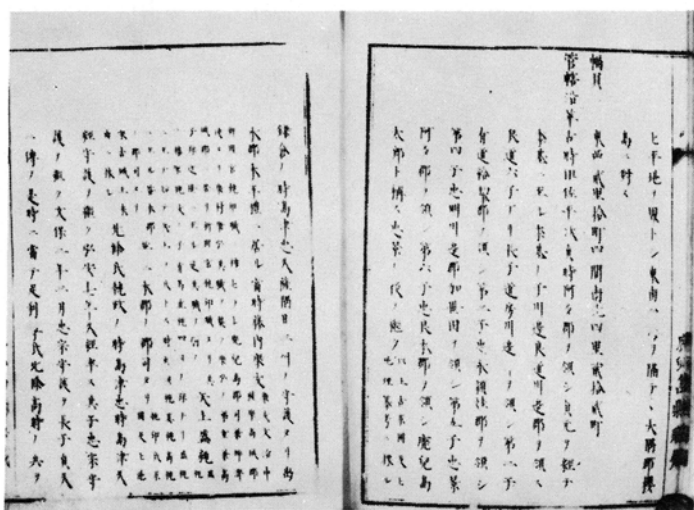
川上家文書 10号 (726頁)



君家累世御城代御家老記 卷首部分 (427頁)



上村行徴日記 卷首部分 (510頁)



鹿兒島県地誌 部分 (2頁)

序

鹿児島市が、今日の如きめざましい発展進歩をとげましたことは、その地域社会に住む鹿児島市民に栄光の歴史があつたからであります。そのかげには、幾多先人達の苦難との斗いの連続と、努力の歴史があり、それが今日の繁栄の道程となり、且その基礎ともなつたのであります。

私達はそれら発展の足跡をふりかえり、歴史としてかえりみるとき、これを記録に残しておくことは市将来の発展のためにも、又後世のためにも必要なことであり、非常に意義深いものがあると考えるのであります。

そこで、昭和三十九年七月、市制八十周年記念事業として市史刊行事業を計画したのであります。その間、隣接谷山市と合併するなど、行政上大きな変動がありました。又、編さん途上におきましても、今次大戦による資料の焼失と

散逸、その他幾多の悪条件が重なつたのにもかかわらず、遂に昭和四十四年、市制八十周年を迎えんとする二月に、第一巻(歴史編)を刊行したのであります。続いて四十五年三月に第二巻(現代編)を刊行し、さらに本日ここに六年有半の才月を費やして、完結編第三巻(資料編)を発刊するはこびに到りましたことは、誠に喜びにたえません。

今日、この資料編を刊行するにあたりまして、監修、執筆の労を賜つた諸先生、並びに市史編さん委員、資料、写真等のご提供を頂いた関係各位に対しまして感謝のほかありません。また、この完成にご協力を頂いた多くの市民の方々に對しましても、深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和四十六年二月

鹿児島市長 末吉利雄

解題

鹿児島市史第一巻・第二巻の本編の編さんと併行して、関係史料の蒐集整理を行ってきたが、その中、主たるものを選び、鹿児島市史Ⅲ資料編として刊行することとなった。

史料採録の方針としては、主として、未刊史料に重点をおき、原則としては、既刊史料より関係史料を抄録する方法はとらなかった。また、本編の記述と併行して、史料を配列する方法もとらなかった。したがって、関係史料を網羅したものではない。既刊及び近刊の関係史料集（鹿児島県史料・鹿児島県史料集）と相補って、尠大な未刊関係史料の幾分かを刊行し、本編記述の裏付けと今後の研究の資料に供すべく、編さんを進めたものである。しかし、時間及び紙数の制限もあって不十分且つ不体裁な内容に終り、鹿児島市史資料編の名に値せぬのではないかをおそれる。終りに、本史資料編のために史料を提供された方々、解説並びに編さんに協力された各位に対し、深甚なる謝意を表しておきたい。

以下収録順に、掲載史料の解題を簡略に記しておこう。

鹿児島県地誌（抄）

鹿児島県立図書館所蔵。鹿児島県庁本。明治十年代後半に本県で編纂掛をおき、作成せるもの。鹿児島郡の中より関係分を抄録した。

鹿児島県地誌備考（抄）

鹿児島県地誌編纂の際の蒐集資料を採録した地誌備考の中、鹿児島郡の分を島津家編輯所旧蔵本、東京大学史料編纂所現蔵本より抄記。但し管轄沿革の項は、地誌と重複するため省略した。

薩隅古代資料

鹿児島市に直接関係する古代史料は少ないが、範圍を薩摩・大隅に拡大し、鹿児島市を含む古代関係史料を諸文献より採録した。

中世関係史料（古文書） 一

承安二年（一一七二）の文書から寛正六年（一四六五）

まで四一四点の關係史料を主として薩藩旧記雜録前編から抜抄。九州史料叢書本によったが、校合、未刊分については県立図書館本・東京大学史料編纂所影写本等によった。他に大日本史料・大日本古文書・鹿児島県史料集など刊本も参照した。採録は文書類に限り、記録類は一切とらなかった。

中世關係史料（古文書）二

明応六年（一四九七）の文書から寛永十一年（一六三四）の文書まで、七五点の關係史料を薩藩旧記雜録前編及び後編から抜抄。県立図書館本の他、島津家本によつて補足した。島旧記とあるのがそれである。

経兼日記

鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本、島津家本旧記雜録後編五十二にも収録。上井覚兼の子経兼の日記。鶴丸城（上山城）普請の様様を示す記事あり。

鹿児島衆中屋敷御検地帳

薩藩旧記増補二十一（宮崎県立博物館蔵写本）を底本とし、後編旧記雜録九十（東京大学史料編纂所蔵本）によ

り補訂。

古記（上・中・下）

鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本。寛永元年（一六二四）より延享四年（一七四七）に至る間の藩庁記録・覚書等。延宝・元禄年間における鹿児島大火の記事詳細。

君家累世御城代御家老記

鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本。御当家御代々御家老記を書写した大山綱奎本を、島津久光が模写し、さらに私見を加えたもの。

覚悟之巻・諏訪祭礼之次第記

鹿児島県立図書館所蔵。鹿児島諏訪社の祭祠に關係した川上家の祭礼に関する心得及び次第書。享保六年（一七二二）川上久東が同久映のもとに応じ、書写させたものである。

薩摩風土記（抄）

鹿児島大学附属図書館所蔵、作者未詳、幕末における鹿

児島・琉球・長崎の風俗を絵図入りで紹介。異本多し。県立図書館本と校合、括弧で異同を示した。鹿児島関係の部分のみ採録。

上村行徴日記（抄）

上村行徳氏所蔵。初代鹿児島市長上村行徴の日記。明治七年一月一日より五月二十二日迄の記事と、同十年一月一日より同十一年二月二十八日迄の記事を抄録した。

上村慶吉履歴

山之口町楠元忠男氏所蔵。二代目鹿児島市長上村慶吉の履歴を記す。

かごしま案内

鹿児島県立図書館所蔵、白野夏雲著の七五調で、当時の市街地の模様を伝えるものである。序に「明治十四年のかごしまの冬の夜は、長きよろこひあるも、寒きくるしみなれ、ともしびのもとに夏雲しるす」とある。

錦江新誌号外

東京大学明治新聞雑誌室保管本を写したもの（明治十五年三月二日発行）である。（鹿児島市史Ⅰ七二六頁参照）

鶴嶺雑誌

東京大学明治新聞雑誌室保管本を写したもの（明治十七年十月二十日発行）である（鹿児島市史Ⅰ七二九頁参照）。

三州義塾文学規則

川辺郡金峰町田布施の二宮忠夫氏所蔵。明治十五年四月、旧私学校時代の積立金を引継いで、教育資金として、河野主一郎を塾長に開校された同塾の文学規則である。教授には岡田源太郎・今藤博堂・東条鶴山・吉瀬愉逸などがいた。

町会書類（抄）

鹿児島市所蔵の資料綴より、戸長時代から市誕生当時までの関係書類を抜抄したものである。

第四百七十七国立銀行

鹿児島市所蔵、明治十二年十二月一日開業せる第四百四十七銀行の祝辞及び答辞、定款である。

和田正苗辞令

常盤町千葉トヨ氏所蔵、屯田兵中佐和田正苗の辞令である。

写真資料

ここに収むる八枚の写真は、一卷、二巻発刊後に収集した写真である。いづれも、鹿児島市及び東大史料編纂所所蔵のものである。

鹿児島島の古文書

鹿児島市所在の古文書として「松原神社文書」・「東郷家文書」・「薬丸家文書」・「加世田家文書」・「川上家文書」・「町田家文書」をあげる。他に鹿児島大学附属図書館所蔵「有馬家文書」（鹿大史学一・二・一三三号）・「志々目家文書」（同一四号）・「川田家文書」（同一五

号・一六号―目録）・「寺尾家文書」（『入来文書』所収、鹿大史学一七号―目録）・「市来家文書」（「裨寝文書」九州史料叢書本・「太奏文書」牛屎文書）（熊本県史料中世編五）・「斑目家文書」（鹿大文学科論集四号「薩摩国祁答院一分地頭斑目氏について」）・「肝付家文書」・「山田家文書」（鹿大史学一八号―目録）・「伊勢家文書」・「玉里文庫文書」（同目録）、鹿児島県立図書館所蔵「伊集院文書」（鹿児島県史料拾遺二）・「川上忠塞家譜」・検地竿次帳等「県庁旧蔵文書」また「磯尚古集成館文書」（一部「鹿児島県史料拾遺」三・八）・「山口文書」||草牟田町山口安子氏蔵（鹿大史学一一号）・「木脇家文書」||田上町木脇祐之氏蔵（一部「鹿児島中世史研究会報」六号）・「指宿家文書」||上荒田町指宿益臣氏蔵（『指宿市誌』所収）等がある。元禄の大火をはじめ、数次の火災、幕末維新の廃仏毀釈、西南戦争や太平洋戦争の災害を経過し、かつ又、幾度の社会変動の結果、焼失散逸せる文書の数は夥しいものがあつたであらう。現在とくにまとまって多数の古文書を所蔵する所はないが、中世から近世へ長い城下町としてかつ薩藩の首邑として、文書を相伝する家は少なくない。今回はそれらの中、未刊分のもの若干をえらび収

録した。

松原神社文書

昭和五年十一月、島津繁麿氏（日置島津家）奉納文書、一卷二十三通、島津貴久・義久・義弘書状、宛名の又六郎・左衛門太夫・左衛門督は島津歳久。

東郷家文書

西千石町東郷重政氏所蔵文書、平姓渋谷氏流、肥前守重位が、島津家久の代示現流剣法を確立、家久・重位の書状多し。

薬丸家文書

紫原町、樋之口一夫氏所蔵。東郷示現流と並ぶ薬丸自願流宗家の相伝文書。明治維新に活躍した薩摩藩士の幕末期入門の際認められた起請文が多数残されている。

加世田家文書

郡元町加世田不二男氏所蔵文書。同家は藩政期には薬師馬場町住。

川上家文書

山田谷、川上矢吉氏所蔵文書。藤姓島津氏族川上氏庶流、川上忠塞孫忠智（肱枕）の子忠兄の末。同家相伝文書その他、伊集院久春（元巢）関係文書あり。

町田家文書

薬師町町田久敬氏（現在東京転出）所蔵文書。藤姓島津氏族町田氏庶流、町田氏十八代久倍の弟久政を初代とする。旧藩時代の居所は戸柱（諏訪馬場）にあった。慶応二年（寅）人別改帳（町田主膳）一冊を紹介。「鹿児島城下土諏訪馬場町田久敬家文書仮目録」あり。

鹿児島島の金石文

鹿児島市（谷山を除く）所在の金石文（主として碑文）を網羅すれば、尠大な量に達するであろう。焼失流失のおそれのある文書と異なり、紛失の危険度はそれ程高くない。しかし、最近の著しい都市開発の進展は、墓碑・記念碑等の保全をおびやかすはじめてきた。今にしてその調査記録を行なっておかなければ、重要な史料を将来失うことになるであろう。今回は従来記録紹介されたものに加えて、新たに調査記録したものを収録することにした。なお、作業が未完であるため、採録もれや記載順の不整一、解説の不備等があるが、一応の成果をここに記し、後補を将来に期することにした。

鹿児島市関係文献目録

郷土史研究者の手引として編集したもので、鹿児島県立図書館保管本の目録である。

年表

鹿児島市制施行以前の年表は、六国史などの刊本を初め、主として古文書・古記録など、既刊・未刊の根本史料に基づいてこれを編修した。市制施行以後の年表は、鹿児島市を中心にして、鹿児島市史（大正五年版）・かごしま・鹿児島市市勢要覧・鹿児島市事務報告書・庁内文書及び報告書、各種新聞などを中心として、これを作成したものである。しかし、それらの典拠を注記することとは省略した。

字絵図（附録）

鹿児島市保管の字絵図で、昭和四十年現在使用中のものである。但し市街地部分は欠けている。

鹿児島市街図（附録）

市街地図は明治十七年（佐藤貞氏所蔵）、明治三十年（鹿児島県立図書館所蔵）、昭和三年（鹿児島市所

蔵）、昭和四十年（建設省国土地理院発行）の四枚である。

例言

- 一、本巻は鹿児島市史全三巻のうち、第三巻資料編である。
- 一、本巻は古代から近代に至るまでの関係資料を収録し、巻末に年表、索引、編纂経過の概要を付載した。
- 一、文字は原則として当用漢字を用い、変体仮名も通用体の平仮名に改めたが、当字・俗字はつとめてそのままの形に止めた。
- 一、誤読、欠脱等については右傍に括弧を以て私見を記し、不明箇所は□を以てあらわし、或は右傍に（ママ）の如く記載した。消字については左に傍線を記し、右傍に訂正の字句を記した。
- 一、本巻の背文字は鹿児島市長末吉利雄の揮毫による。
- 一、本巻見返しの写真は島津家久書状である。（東郷家文書3号）
- 一、本巻解題の執筆は五味克夫、四本健光が担当した。

鹿兒島市史 目次

第1部 鹿兒島県地誌・同備考(抄)	一
鹿兒島県地誌(抄)	二
鹿兒島県地誌備考(抄)	五〇
第2部 古代関係史料	七
薩隅古代史料	七
第3部 中世関係史料	二五
中世関係史料(古文書)一	二六
中世関係史料(〃)二	二六
第4部 近世関係史料	二九
経兼日記	二九
薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳	三〇
古記(上)	三七
古記(中)	三七
古記(下)	四〇

君家累世御城代御家老記……………四七

覚悟之卷・諏訪祭礼之次第記……………四七

薩摩風土記(抄)……………四九六

第5部近代関係史料……………五〇九

上村行徴日記……………五二〇

上村慶吉履歴……………五五七

かごしま案内……………五七三

錦江新誌号外……………五七五

鶴嶺雑誌……………五八四

三州義塾文学規則……………六二四

町会記録……………六二二

第四百四十七国立銀行……………六五三

和田正苗辞令……………六六二

写真資料……………六六五

第6部鹿児島の古文書……………六六九

松原神社文書……………六七〇

東郷家文書	六六
薬丸家文書	六九
加世田家文書	七二
川上家文書	七三
町田家文書	七五
第7部 鹿児島市の金石文	七五
第8部 鹿児島市関係文献目録	八五
第9部 年表	八九
第10部 索引	九六
第11部 編さん沿革	一〇五
付録 鹿児島市地図	
字 絵 図	

